

廻り道はすてき

人形劇団ひぼぼたあむ 永野 むつみ

子ども劇場の上演のときのこと。演目は『かえるくん・かえるくん』。かえるは森の中でこぐまのぬいぐるみを拾う。「一緒に暮らそう。」かえるは新しい友達を連れて帰り共に暮らしながらふたりは仲良しになる。ところがある日こぐまは急に元気がなくなる。理由を聞いても「自分でも分からない」と。困ったかえるは「どうしちゃったのかなあ」とひとり呟く。すると客席の子ども達が口々に様々なことを言う。「疲れたんじゃないの」「お腹が空いたんじゃないの」「おうちに帰りたいんだよ」等々。ところがこの日は「うんこだ、うんこがしたいんだよ。」年長の男の子が誰にも先駆けて迷いなくそう言ったのだ。しばらくして3歳の女の子が小さな声で「ママに会いたくなかったんだよね。」観てわかることは台詞にはしない作風のせい客席の子ども達は実に良くしゃべる。強制して言わせた言葉でない分、自然で的確で魅力的でまるで事前に台本を読んだの？と思える程。そしてその言葉は確実にその子その子の「今」を映し出す。言葉にドラマが潜む。

終演後、保護者会の方々とその話になり「わかるというのは年齢じゃないのねえ」としみじみと語られた。ほんとですと答えてつつ私は、うんこだよと言った子に思いをはせる。もしかするとその子は小さな子の面倒をみたことがあるのではないか。その小さな子が突然元気がなくなって、そのときはうんこだった！？。半端に体験があるからこそその深読みや勘違い。それでも私は体験をくぐり抜けた言葉に値打ちを見い出したい。かつてアヒルに手をかまれたことのある子が私に言ったものだ。アヒルには歯がある。痛かったもんと。図鑑で見ただけの子に、ばっかじゃないのと言われながらも歯があると、まずは言いつのる子どもに私は共感し、愛おしいと思う性質らしい。みなさんはどうですか。



永野 むつみ氏
プロフィール

東京都府中市在住。山形県生まれ。和光大学卒業後プーク人形劇アカデミー、人形劇団カラバスを経て人形劇団ひぼぼたあむ設立。絵本塾「むつみの会」主宰。とらまる人形劇学校設立に参加。同校専任講師